私達の職場 18

より豊かな未来を模索して

「ククリット首相落選」4月5日の日本の新聞はいっせいにタイの総選挙の結果を報じた．日本とタイの関係は長く，数百年に及んでいる．最近では，日本より無償協力事業としてモンクット王工大の校舎新築のために，1973，74 年の両年にわたり総額 9.5 億円（実験機器分1億円を含む）が供与され，その結果 1975 年 11 月に電気通信実験棟，講堂，図書館，体育館等の建物が完成したという．タイに対する日本の最近の技術協力の実績をみると，1975 年中の調査団の派遣が 20 件 79 名，専門家派遣が 22 件 93 名（75 年末における長期滞在専門家は 52 名），研修員受入れが集団コース 90 件 105 名，個別コース 12 件 56 名で，計 161 名，機材供与が携行機材分も含めて 60 件，金額にして約3億円にのぼっている．わが国のタイに対する経済協力を他の先進諸国のそれと比較すると，資金援助（75 年までの3年間の借款供与額）の面では，米，仏，独を大きく抜いて第1位にあり，技術援助（74 年の実績）はタイ側の評価額によると米につぎ，独，豪とほぼ同じ水準にあるという．

このようにタイにとって日本は，最大のパートナーであり，タイには多数の日本人が滞在し，多くの日本の土木技術者が活躍している．昭和 51 年3月 14 日から 20 日まで土木学会第4回土木技術者のための海外研修旅行に随伴してバンコクを訪れる機会があったので，私達の職場として A.I.T.（Asian Institute Technology）について紹介する．

A.I.T. は 1959 年に創設された SEATO Graduate School of Engineering を前身とし，1967 年 11 月タイ国政府の特別立法により，発展途上にあるアジア諸国における技術者不足を，欧米の大学ではないアジアの教育機関で充足させることを目的として創立された．A.I.T. はバンコクのドン・ムアン空港より約 15 km（バンコク市内より 40 km）のところに位置し，ハイウエイを 30 分ほど走った田園の中に広大なキャンパスがある．一歩ここに入るとのどかな田園風景とは打って変って近代的設備を誇る A.I.T. センター，講義室，研究棟，学生寮など真白い建物が南国の強い太陽の光を受け，燃えるような緑の芝生と調和して美しい．これらの施設はすべて先進国よりの醵出によって作られており，A.I.T. センターは日本よりの寄附によるものである．ここに勤務する日本人は訪問当時4人おり，1人は出張中で西村（東大），森野（京大），竹宮（京大）の三氏にお会いすることができた．皆元気で完全にA.I.T. の生活の中にとけ込んでいる．A.I.T. にはベンダー学長（アメリカ人）を中心に世界の各国から 45 名の先生が派遣されてきており，アジア，アフリカの各地から約 350 名の学生が集い，日本からも通算6人目の学生として昨年8月より三浦さん（東工大出身）が学んでいる．女子学生も多数おり，教育はきびしいようだ．現在は，表に示すように6つの Divison と 15 の専門分野に分かれた授業が行われている．

A.I.T. の講義の内容

Divison	Environmental Engineering（環境工学） Geotechnical Engineering（土質工学） Structural Engineering and Materials（構造工学と材料） Community and Regional Development（社会開発） Water Resources Engineering（水資源工学） Industrial Development and Management（産業管理）
Field of Study	Water & Wasterwater Engineering Environmental Technology & Management Soil Engineering Engineering Geology Agricultural Soil & Water Engineering Structual Engineering & Construction Structual Mechanics & Materials Agricultural Systems Engineering & Management Transportation Systems Planning Human Settlement Planning & Development Hydraulic Engineering Irrigation Engineering Coastal Engineering Water Resources Development Industrial Engineering & Management

ここでは，1年を 9～12 月，1～4 月，5～8 月の3期に分けて授業を行い，修士は 4～5 期，博士は 5～6 期の課程を終了しなければならない．先生方も期間を数年と限られて教鞭をとっているので，集中授業になり，皆非常に熱心で宿題も多く，教える方も学ぶ方も真剣だ．試験の成績が悪い学生はただちに放校処分となるので，うかうかしていられない．卒業までには多数の学生が放校されるということだが，全額を奨学資金でまかなっていることを思えば当然のことかも知れない．

授業は，すべて英語であり，入学当時の試験で一定レベルに達していない学生には英語の特訓が行われる．風土　民族，宗教による慣習の違いや，国により英語に独

得のなまりがあったりして教えるのに戸惑うことが多いという．それぞれの国柄や風習の違う学生に土木工学のすべての内容を理解させることは難しい問題のようた．西村さんは，「卒論の学生を家によんだとき，一番困るのは食事です．人種，宗教の違いにより絶対に口にしないものがあるから，何種類もの料理を用意しなければならないので家族が大変です……」と話していた．このことが象徴的にこの大学のすべてに通じてるように感じた．学生食堂でも，いく種類にも分れた窓口からさまざまなものを調理しているのが目につく．図書館を訪れると，世界各国から送られてきた文献が，見事に整理されていた．その中に，土木学会誌と論文報告集が目についたので，「日本語を読む人がいますか」と尋ねてみると，「日本には，皆，非常に関心があり，10% 近くの人が日本語を理解します」という竹宮さんの返事であった．帰国を目前にした森野さんは「非常に充実した生活をすることができました」と，2年間の感想を語っていた．ここに勤務するほとんどの先生はバンコク市内から特別バスで通っている．日中は暑いので毎朝7時 30 分までに学校につき，7時 45 分から講義が始まる．3時 15 分に講義を終わり，A.I.T. 3時30分発のバスで帰宅するのが日程だ．ほとんどの学生はキャンパス内の寄宿舎に入っているので，1日中勉強に打ち込める．帰宅した先生方を待っているのは，日本からの訪問者や大使館等の晩餐会など，非常に忙しい生活である．

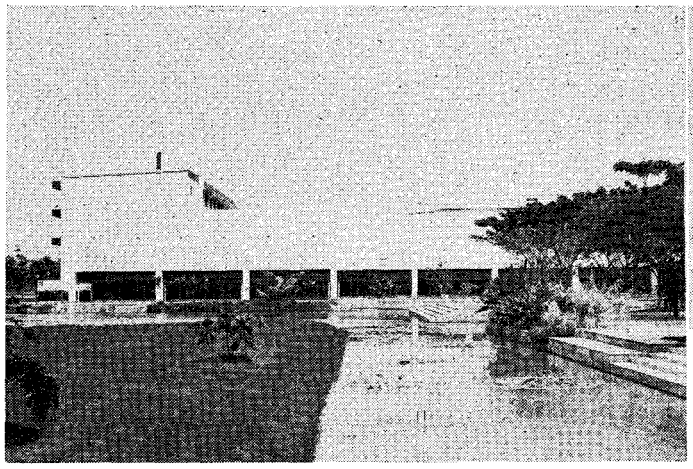
A.I.T. の実験室では，竹筋コンクリートの供試体とか，米を貯蔵するライスビンや世界の各国から寄贈された実験器具が目につく．「ここでの高度な教育で得た知識を，東南アジアの諸国の持っている問題点とどのように結びつけていくかが重要なことです」と，ある外人教授は話していた．ここでは，現地にある新しい材料の開発ということで，ヤシのせんいをセメントに入れたり，モミがらを焼いてフライアッシュの代わりに使う研究や，東南アジア独特の地域・風土にあった住宅の開発，水資源，人口問題など地味で根気のいる研究が行われている．しかし次々と先生が代って行くわけだから，ここに学んだ学生がしっかりとそれらを着実に身につけていかなければ A.I.T. の設立の趣旨は生かされないであろう．

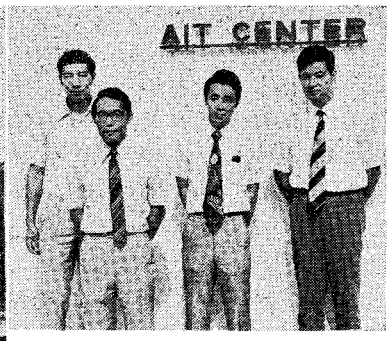
日本の寄附による A.I.T. センターは，この大学の中枢機関であり，講堂，セミナー室，宿泊施設，医療機関，郵便局，印刷所，レストラン，ビリヤード・ルームなどが完備しており，ここで生活する人々が何一つ不自由なく過ごせるように配慮されている．ここのホールでは年に1回 A.I.T. Day と称する全学あげての文化祭が開催され，各国の学生が，それぞれ自慢のお国柄の民族衣装を着て，踊ったり，歌ったりして実に楽しい雰囲気であるという．「このセンターは，非常に評判がよく，日本人として鼻が高い」と先生方は話していた．

この大学には評議員会があり，個人の資格で選ばれた評議員として日本より渡辺武氏（前アジア開発銀行総裁），吉川秀夫氏（東工大教授）のお二人が A.I.T. のために活躍している．

学問に国境はないはずの A.I.T. においても入国を希望する学生の国とタイ国との関係でビザがおりないケースもあると聞く．政治にふり回されることなく，ここに学んだすべての学生が将来それぞれの国の技術者のリーダーとして A.I.T. での貴重な経験を結実させることを確信し，より豊かな未来を祈りながら南国のキャンパスを離れた．

［文と写真　石塚　健］





右より森野・西村・竹宮の三先生と三浦さん（学生），左は A.I.T. センター全景